

第4章 特別史跡の本質的価値

1 特別史跡の本質的価値

(1) 菅家と廉塾の文化活動

菅茶山は神辺で本陣役を務めていた尾道屋菅波家の一族にあたり、尾道屋から別家した本荘屋菅波家の流れに属している。父樗平は本荘屋の4代にあたる。

樗平は本姓を高橋氏といい、川北村の高橋金右衛門金豊の末男である。幼名は亀松、名は扶好、通称は久助といい、芦丈・樗平と号した。

茶山の母・半は備中国井原村の佐藤安右衛門正弘の娘であったが、本荘屋3代の菅波久兵衛好永に子がなかったため半を養女とした。

好永が没した後は半と樗平が結婚し、樗平が本荘屋の家督を継ぐが、宝暦2（1752）年に26歳で家督を譲り、自らは別家して農業と酒造業を営んだ。家長として勤めながら学問をよくし、詩歌をよくした風流人でもあった。中でも蕉風の俳諧に興味を持ち、句集に『三月庵集』がある。

半も「喜んで国史を誦して、能くその子を訓導す」（頼山陽『茶山先生行状』）と記されており、山陽の父の頼春水が撰した墓誌には「礼卿（茶山）兄弟、文に臨みて、或いは古人の名姓を逸すれば、輒ち必ず之を諮う。一として記せざるなし」とあるように、父母共に文芸や学問に対する造詣と理解が深かった。

また、高橋金右衛門の嫡子として神辺に生じた高橋慎庵は、樗平の兄で茶山の伯父にあたる。名を克昭、為牛と号し、権右衛門と称した。幼少から学問を好み、長じて医業をするかたわら漢籍などに通じ、和歌や狂歌をよくした。また、筑前黒田侯が参勤の帰途神辺本陣に宿泊した際、招かれて「古事記」の講義を行ったという。黒田家の知遇を受けて以降は福岡藩に招聘され、筑前に往復する途中に数多くの狂歌を残している。

こうした環境は、茶山が幼くして学問や文芸が身近に存在しており、幼少期や青年期を過ごしたことを想像させ、茶山の思想形成に大きな影響を与えたことが想像される。

後に茶山は環境による人間形成の必要性を感じ、私塾を開いて教育者となるが、原点はこうした幼少期の体験にあると言えるかもしれない。

菅恥庵（1768～1800）は茶山の末弟にあたる。名は晋宝又は晋葆、字は信卿、通称は圭二、三閨・恥庵と号し、儒学者となった茶山に代わって家督を継いだ。好学な一家の例に洩れず、幼にして学問を好み、10歳で詩を賦するという天才児であった。15歳で備中・鴨方の西山拙斎の塾に入門して学問を究め、19歳で京都に遊学して京都に遊び、道光上人、沈雲上人らと親交を深めた。

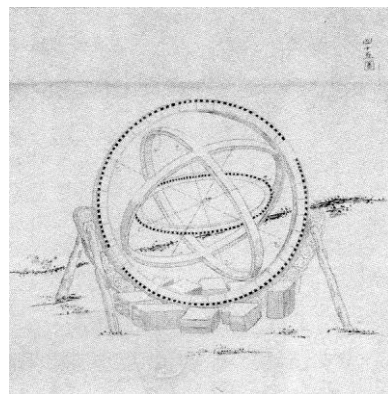
寛政9（1797）年10月、恥庵は長崎に遊学するが、この遊学は恥庵を大きく触発する。翌年秋には京都に上って塾を開き、兄と同様に儒学者の道を歩みはじめるが、元来健康に勝れないところに病にかかり、寛政12年8月に33歳で没した。墓は京都の鳥部山にあり、その墓誌は頼山陽の撰文である。また、黄葉山の東麓にある菅家の墓地にはその遥拝の碑がある。

恥庵の若すぎる死は、山陽の叔父である広島藩士・頼杏坪など多くの人から惜しまれた。特に、20歳も年の違う茶山にとって弟の死は深い悲しみであり、茶山が漢詩集『黄葉夕陽村舎詩』前編を出版した際、その附録として「恥庵詩集」と題して漢詩文を収録している。

菅万年（1773～1811）は、樗平の次男で深津村の松岡家を継いだ猶右衛門汝榎の長男として生まれた。茶山の甥にあたる。名は公寿、通称は養介（助）のちに長作、万年、金粟園と号した。恥庵が没した後、茶山は万年を養子としている。これは万年を後継者にしようと考えていたからであり、茶山の妹・チヨの娘である佐保と結婚させており、佐保が没した後はその妹敬と結婚させている。

万年が特に熱心に学んだのは天文学であり、中国で出版された天文学に関する機器の図の写しで

ある「諸儀象図」と題する巻物は、その精緻な筆写から万年の天文学に対する強い情熱がうかがわれ、日食・月食の観測記録も残されている。



諸儀象図

茶山が後継者と期待し、自らも天文学に打ち込んだ万年であったが、元来病弱であり、文化8（1811）年7月に39才で没した。墓は菅家の墓地にある。茶山は当時64歳であったが、悲痛きあまりなく「老らくの我が跡をこそたのしみに、我にとはるる塚となりしか」という和歌を詠んでいる。

菅自牧齋（1810～1860）は諱を惟繩、字を昭叔と称し、初め菅三と呼んだが、後に三郎と改め、自牧齋のほか、良庵・瀬庵・蘭齋などと号した。

文化7（1810）年に万年の長男として神辺に生まれた。万年の没後は茶山の愛は一段と高くなっていったようで、茶山の養子となっていた門田朴齋は後に離縁され、自牧齋が養子となった。この時、自牧齋は18歳で、茶山の死はこの年である。

自牧齋は鋭意勉強して頼杏坪、頼山陽、篠崎小竹などに師事して、廉塾の2代塾主となり、福山藩から五人扶持を与えられた。天保8（1837）年には藩校・弘道館出仕を命ぜられ、嘉永2（1852）年には二人扶持を加増され、安政2（1855）年には経筵に侍講。安政5年には給人に進むが、万延元（1860）年7月に51歳で没する。墓は菅家の墓地にあり、その碑文は石川成章の撰である。

菅徴卿は名を良平といい、字を汝猷と号した。本荘屋菅波氏の分家にあたる中屋菅波氏の七良次の子として生まれ、茶山の三従弟にあたる。長じて学問を修め、医学を学んで靱に住み、医者を生業として菅波を修じて菅と称した。

その居宅に古松があることから、聴松庵と称し儒医として名を馳せ、碩学の往来も多かった。なかでも恥庵や山陽との交友が密であり、山陽はその絶筆である病床日誌をはるばる京都から送っている。天保6（1825）年に没し、神辺の浄土宗万年寺に葬られた。年は70歳前後であった。江戸時代の朝鮮通信使が詠んだ漢詩文は良平によって版木にされて靱町の福禅寺に残されており、「福禅寺対潮楼朝鮮通信使関係史料」として福山市重要文化財に指定されている。

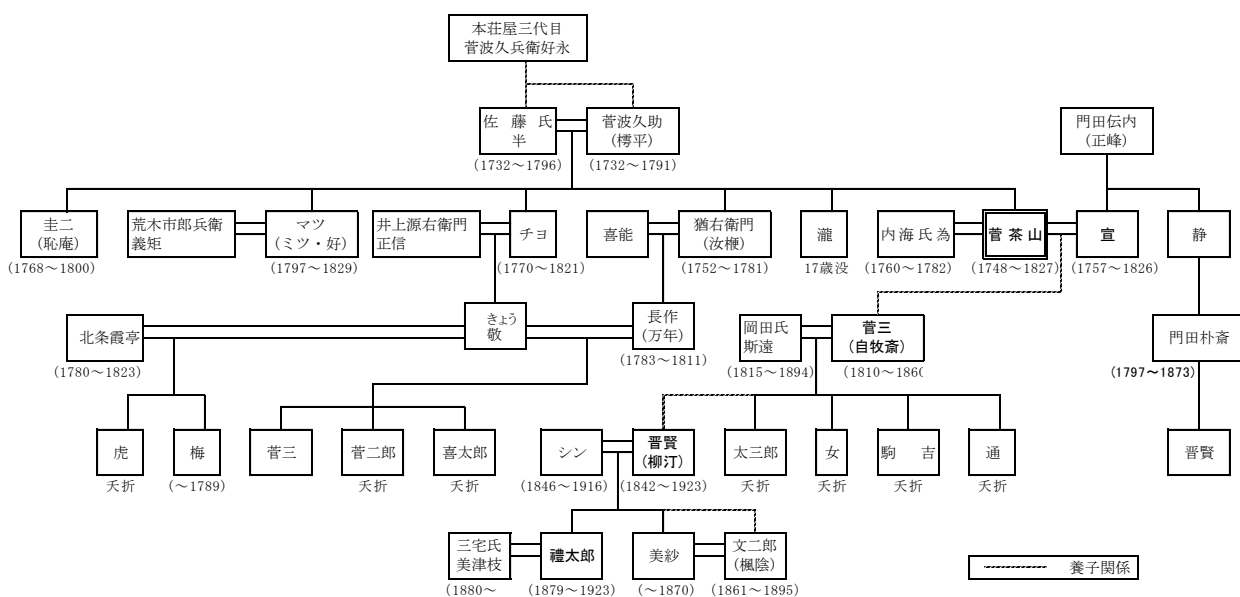


図 4-1 菅家系図

表 4-1 菅茶山に関する年表（1 / 3）

西暦	和暦	年齢	できごと
1748	延享 5	1	2月2日、菅波樗平・半の長男として備後国神辺に生まれる。
1752	宝暦 2	5	弟・汝榎が生まれる。
1766	明和 3	19	初めて京都に遊学し、市川某に古文辞学を学ぶ。
1768	明和 5	21	弟・恥庵が生まれる。
1770	明和 7	23	京都に遊学し、しばしば池大雅を訪ねる。
1771	明和 8	24	この頃、那波魯堂の塾に入って朱子学を、和田泰純に入門して医学を学ぶ。
1773	安永 2	26	京都に遊学し、初めて大阪の「青山社」に頼春水を訪ねる。甥万年が生まれる。
1775	安永 4	28	この頃、現在の廉塾の南西に私塾を開く。藤井暮庵が入門する。
1780	安永 9	33	11月27日、伯父・高橋慎庵没。京坂地方を遊歴。遊歴中に大坂の葛子琴ら「混沌社」社友と交わる。
1781	天明元	34	8月25日、弟・汝榎没(30歳)。
1782	天明 2	35	2月17日、妻・為没(23歳)。
1784	天明 4	37	門田氏宣(28歳)と再婚する。
1785	天明 5	38	私塾・金栗園の名称が出てくる。
1788	天明 8	41	藤井暮庵と広島・宮島に遊び、頼杏坪・頼山陽と出会う。『遊芸記』・『冬日影』が成る。
1791	寛政 3	44	2月18日、父樗平没(65歳)。
1792	寛政 4	45	閨塾の名称が出てくる。この頃、黄葉夕陽村舎・閨塾が開塾される。苗字「菅波」の波を取って「菅」とし、宗旨を改めて士族に列する。塾経営に専念するため家業を末弟恥庵に譲る。
1794	寛政 6	47	『北上歴』の旅に出る。父樗平の『三月庵集』を編集する。
1796	寛政 8	49	黄葉夕陽村舎・閨塾が福山藩の郷校になり、廉塾・神辺学問所と称するようになる。
1800	寛政 12	53	8月27日、弟恥庵が京都で客死。京都・東山に葬られ、頼山陽が墓誌名を記す(33歳)。弟汝榎の子万年を養子とする。
1801	享和元	54	7月、福山藩儒となり俸五石となる。藩校弘道館で講釈を始める。
1804	文化元	57	1月、福山藩主・阿部正精の命で江戸へ赴く。 5月、常陸を旅する。11月5日、藩主に従い帰郷する。
1805	文化 2	58	俸十石となる。藩主・阿部正精から『福山志料』編纂を命じられる。
1807	文化 4	60	2月17日夜、神辺宿大火があり茶山宅(金栗園)も類焼。
1808	文化 5	61	門田朴斎が入門する。
1809	文化 6	62	4月5日、『福山志料』35巻の編纂が完成する。 11月、伊能忠敬が来訪する。 12月29日、頼山陽(30歳)が廉塾の都講(塾頭)になる。
1810	文化 7	63	後に廉塾の後継者となる甥万年の子、菅三(自牧斎)が生まれる。
1811	文化 8	64	閏2月8日、頼山陽(32歳)が廉塾を去り、上京する。 7月29日、継嗣万年没(29歳)。敬(29歳)、遺児菅三(2歳)。
1812	文化 9	65	『黄葉夕陽村舎詩』前編が刊行される。
1813	文化 10	66	8月23日、北條霞亭(34歳)が廉塾の都講になる。
1814	文化 11	67	5月、阿部正精の命で江戸に赴く。 在府中、上下格給人(扶持を賜う平士)となり、俸20石となる。
1815	文化 12	68	2月16日、江戸を發し帰郷(3月29日)
1817	文化 14	70	2月2日、70歳の祝宴が開かれる。 福山藩主から金500疋、松平定信から寿詩寿盃を贈られた外、岡本花亭・谷文晁等から書画を贈られる。(「礪溪跪餌図」)。
1818	文政元 (文化 15)	71	大和・吉野・京都に遊ぶ。『大和行日記』が成る。
1819	文政 2	72	『答問福山風俗記』を幕府へ提出する。
1820	文政 3	73	3月5日、門田朴斎(24歳)を養子とする。この年、『室町誌』をまとめる。

表 4-1 菅茶山に関する年表 (2 / 3)

西暦	和暦	年齢	できごと
1921	文政 4	74	5月10日, 北条霞亭が藩主阿部正精の命により上府。
1823	文政 6	76	俸 30 口となり大目付に準じる。 8月17日, 北条霞亭没(44歳)。11月20日, お敬が帰郷。 『黄葉夕陽村舎詩』後編が刊行される。
1825	文政 8	78	養魚池が築かれる。
1826	文政 9	79	5月19日, 継室の宣が歿する(70歳)。 12月22日, 茶山が藩主阿部正寧に初めて謁見。酒食・菓子詰・文具を授けられる。
1827	文政 10	80	1月11日, 藩主阿部正寧館で茶山が手熨斗を授けられる。4月7日, 80歳の祝宴が開かれる。 7月, 門田朴斎を離縁し, 菅三(後の自牧斎)を養子とする。 8月13日歿。諡は「文恭先生」。20日に川北村網付谷に葬られる。
1832	天保 3		『黄葉夕陽村舎詩』遺稿が刊行される。
1856	安政 3		『筆のすさび』が成る。
1860	万延元		7月3日, 菅三(自牧斎)没(51歳)。
1915	大正 4		11月10日, 茶山が従四位を贈られる。
1923	大正 12		2月20日, 禮太郎没(48歳)。3月23日, 3代晋賢没(81歳)。
1926	大正 15		3月, 深安郡北辰会主催で「菅茶山没百年祭」を開催。福山・東京でも開催。
1934	昭和 9		1月22日, 「廉塾ならびに菅茶山旧宅」が史跡に指定される。
1940	昭和 15		2月23日, 「菅茶山の墓」が県史跡に指定される。
1951	昭和 26		7月1日, 標識と説明板の設置落成式が行われる。
1953	昭和 28		3月31日, 「廉塾ならびに菅茶山旧宅」が特別史跡に指定される。 10月5日, 文化財保護委員会告示第46号で官報告示される。
1979	昭和 54		10月, 郷土史研究会主催で「菅茶山没 150 年祭」開催。
1982	昭和 57		3月5日, 神辺町立歴史民俗資料館で, ブロンズ製の「菅茶山坐像」が建立される。 (現在は菅茶山記念館へ移設。)
1986	昭和 61		9月20・21日, 菅茶山 160 年祭実行委員会の主催で「菅茶山 160 年祭」が開催される。
1988	昭和 63		4月, 「菅茶山先生遺芳顕彰会」が発足し, 会報誌「菅茶山顕彰会会報」を発刊する。 ～2016年3月31日現在第26号)
1992	平成 4		11月3日, 菅茶山記念館が開館。
1993	平成 5		6月, 廉塾の書庫で保存されていた黄葉夕陽文庫が所有者より広島県立博物館に寄託される。
1995	平成 7		菅茶山記念館・菅茶山先生遺芳顕彰会主催で「第1回茶山ポエム絵画展」が開催。 (～現在まで) 7月, 企画展を受けて黄葉夕陽文庫が所有者より広島県に寄贈される。
1998	平成 10		4月28日～5月31日, 広島県立歴史博物館で春の企画展「菅茶山とその世界Ⅱ—黄葉夕陽文庫の概要—」開催。 10月17・18日, 菅茶山生誕 250 年を記念して, 廉塾・菅茶山記念館・神辺町文化会館を中心に記念式典・特別展・活花展等を顕彰会・神辺町・神辺町教育委員会共催で「菅茶山生誕 250 年祭」開催。
1999	平成 11		7月28日, 菅茶山記念館南庭に「菅茶山先生顕彰碑」が建立される。
2000	平成 12		10月, 菅茶山生誕 260 年祭実行委員会・菅茶山遺芳顕彰会主催で「菅茶山生誕 260 年祭」開催。
2002	平成 14		10月14日, 菅茶山先生遺芳顕彰会主催で茶山ポエム絵画展 10 周年記念「廉塾ポエム祭り」が七日市の廉塾を中心として開催。参加者約 500 名。

表 4-1 菅茶山に関する年表（3 / 3）

西暦	和暦	年齢	できごと
2003	平成 15		10 月 18 日, 菅茶山生誕 255 年祭実行委員会・神辺町・神辺町教育委員会・菅茶山先生遺芳顕彰会等の主催で, 廉塾・神辺町文化会館を中心に「菅茶山生誕 255 年祭—いま煌めく茶山と歴史街道神辺宿—」が廉塾・神辺文化会館を中心に開催。
2004	平成 16		11 月 3 日, 菅茶山遺芳顕彰会主催・七日市上町内会協賛で「第 3 回茶山祭」開催。
2005	平成 17		4 月 23 日, 菅茶山先生遺芳顕彰会の総会で, 会の名称を「菅茶山顕彰会」に変更。 11 月 3 日, 菅茶山顕彰会主催で, 「第 4 回茶山祭」が廉塾を中心に開催。
2006	平成 18		11 月 3 日, 「第 5 回茶山祭—いま煌めく文化の香り 茶山と廉塾—」開催。
2007	平成 19		10 月 13 日～27 日, プレ菅茶山生誕 260 年祭開催。 11 月 3 日, 「第 6 回茶山祭—いまきらめく茶山文化の香り—」開催。
2008	平成 20		11 月 3 日, 菅茶山顕彰会と菅茶山生誕 260 年祭実行委員会の共催で「菅茶山生誕 260 年祭—菊薫るかざり茶山の文化あり—」開催。
2011	平成 23		10 月 15～17 日, 新たに結成された運営委員会主催で「神辺宿・歴史まつり」が廉塾・神辺本陣・三日市通りなど旧山陽道界隈で開催。
2014	平成 26		8 月 21 日, 広島県立歴史博物館所蔵の「菅茶山関係資料」(5,369 点)が, 国重要文化財に指定される。
2015	平成 27		7 月 1 日, 特別史跡廉塾ならびに菅茶山旧宅保存活用計画策定委員会を設置。
2017	平成 29		3 月 31 日, 特別史跡廉塾ならびに菅茶山旧宅保存活用計画策定。

(2) 菅茶山の業績と塾施設の関係

ア 生い立ちと塾施設

菅茶山は、延享5（1748）年2月2日に備後国安那郡川北村（広島県福山市神辺町川北）に生まれた。本名を晋帥^{ときりのり}、字は礼卿^{れいけい}、幼名を喜太郎^{きたろう}、元服後は百助^{ももすけ}、家督を継いだ後は久治郎と改め、後に太中^{たちゅう}・太仲^{たちゅう}と称した。茶山という号は、高屋川を挟んで望む茶臼山に因んで名付けられた。

江戸時代になると、国内の学問・思想は朱子学によっていたが、茶山の生まれた中期後半以降は、古義学・古文辞学・陽明学・闇齋学など新たな学派によって朱子学派の力が一時期衰えてくる。しかし、当時において、これらの新興学派の中から生活や風俗を乱すといった事態がしばしば生じたため、反動として朱子学復興の兆しが見え始めた時期でもあった。

明和元（1764）年、茶山は16歳の時に疱瘡を避けて京へ遊ぶ。18歳で家督を継ぐが、里生（庄屋）としての仕事を厭うようになる。文字を嗜み学問を志し、19歳で再び京都へ遊学して古文辞学を市川某に学ぶが、3～4年間学んで帰郷する。その後、再び京都へ遊学し、古医法を和田泰純^{やすずみ}に学んだ。廉塾には茶山が医者をしていた頃のもの^{やすずみ}と伝えられる薬壺が残されている。



茶山の薬壺

明和8年頃には那波魯堂^{なわろどう}門下となり朱子学に転向する。魯堂は宝暦元（1751）年に聖護院宮忠誉法親王の侍読となり、寺域内に家塾（※1）

を設けた。この塾に、茶山の兄弟子で終生の親友となる備中・鴨方の西山拙斎が入門している。茶山は拙斎の薦めで、入塾したものと考えられる（「文恭先生年賦略」）。

その後、寛政2（1790）年、幕府による「寛政異学の禁」という政策によって朱子学は正学と位置付けられた。

茶山が目指したのは、学問や教育の力によって当時の身分制的な社会秩序を回復し、維持していくことであった。酒造業や農業を営む裕福な家に育った茶山であったが、神辺という農村社会においても階層分化によって遊民が増加し、村が荒廃していくという現状を目にしていた。茶山は「神辺と申す処ことの外悪風俗之処にて、村々にて歴々など申てはかまありき候人まてみな博徒に候」とし、「わたくしなどもはたち計迄はくちもうち富第一をもち候ほどに候へハ、酒色などの悪行ハいうことをまたず候、其中ニふとはいかい発句てふ物をいたしおほへ候、それよりうた詩などゝすこしツ、読書にむかい候」（「郷塾取立に関する書簡」）と述べている。茶山もまた遊学する以前には、博打を打ち、富籤を買い、酒色に耽るといった時代があった。しかし、俳句を覚え、学問を志すようになったと自らの体験を語っている。



廉塾の鐘

廉塾には授業の始業を告げたといわれる鐘が伝えられており、安永4（1775）年の銘がある。寄贈者は藤井次郎左右衛門昭房。藤井暮庵の義父・藤井蘭水である。この年の春、茶山が私塾で教育を始め、暮庵が師事したことを記念して贈られたと考えられる。

銘「百炬照冥 撃以饗靈 長此降福 美溢家庭 安永四年乙未三月中浣 藤井次郎左右衛門昭房更鑄」「百の篝火が祖先を祀る送り火となるように、この鐘を打てばその尊い音色は周囲に響き渡る。永遠に天からの幸が家庭に満ち溢れるように。」

安永4年は、『暮庵先生行状略記』（以下『略記』）に「茶山先生ノ門ニ入りテ教ヲ受ク」とあり、

茶山の最初の弟子である暮庵が9歳で入門した年にあたる。この頃、茶山の私塾が開塾されたものと考えられるが、名称については不明である。場所は特別史跡指定地外にあり、今の廉塾から近世山陽道を隔てた南西に位置していたようである。この私塾は10歳前後の村童を対象とした素読を教える寺子屋のようなもので、茶山の居宅を兼ねていたと考えられる。

10年後の天明5(1785)年8月には、「^{きんぎょくえん}金栗園寄宿、茶山先生ノ別塾ナリ」(「略記」)と金栗園の名称が初めて出てくる。私塾の近くに桂樹があったことから、塾を金栗園と称した。金栗とは木犀の総称である。この頃には、自宅の一部を使って来訪者の宿所とし、塾は門人たちの講釈の場として使用されていたようである。その後、塾生が増えたため、居宅の東北に学舎を建て、黄葉夕陽村舎・閭塾と名付ける。塾舎の新築については、「廉塾屋敷図」の書入れに「寛政2(1790)年8月、新屋敷」造成のために福山藩が丈量を行ったことが記されており、「当駅町裏に六間に式間半之家一ヶ所瓦葺に仕り建て置く」(「神辺閭塾記」)という記述から寛政2年頃と考えられる。名称は「黄葉山の北側にある集落(黄葉夕陽村)の学舎」という意味から名付けられた(「^{ちやおうこうじゆこうしぜんごへん}茶翁口授黄詩前後編筆記」)。

続いて、寛政8(1796)年には、この塾を永続させることを目的に、塾の建物・塾附属の田畑を福山藩に献上し、福山藩の郷校とした。以後、「廉塾」、正式には「神辺学問所」と呼ばれるようになった。廉塾という名称は、柴野栗山が学舎に名付けたものという(「文恭先生年賦略」)。

これまで、黄葉夕陽村舎・閭塾は天明元(1791)年頃に開塾されたとされてきた。ところが、塾の財務管理・運用に関する沿革をまとめた「神辺閭塾記録」の中で、茶山が川北村庄屋・組頭を通じて私塾の開設を福山藩に願い出た文書の中に「此度於私宅一箇月六度孝経講釈始申度奉願上候」という記述と「寛政三亥歳」の年が記されていることから、翌年の寛政4(1797)年頃に求められるようになってきた。

※1 家塾は、武士や学者が幕府や藩の要請を受け、勤務の余暇に私宅で教育することを認められた塾。私塾は、民間教育施設で学びたいという意欲があれば、身分の別なく誰でも学べた。

イ 儒学者・漢詩人としての茶山

寛政4(1792)年、茶山45歳の時に福山藩4代藩主・^{あべまさとも}阿部正倫から五人扶持を与えられる。頼山陽の「茶山先生行状」には、「阿部正倫と林大学頭が詩を論じた時、当世一の詩人は備後の菅茶山であるという話になった。役人に調べさせたところ、学業が優れていることから、五人扶持が与えられた」とある。これは茶山が詩人としてだけでなく、教育者としての評価も受けたものと言えよう。正倫は慌てて茶山を召し抱えようとするが、病気を理由に断ったという逸話も残っている。それでも、五人扶持を与えることで面目を保ったという。

この時、苗字「菅波」の波の字をとって一字で「菅」として、宗旨人別帳にも家中並(藩士並)とされた。

形の上では藩の儒者となった茶山であったが、その活動拠点はあくまでも黄葉夕陽村舎にあった。そこから「^{がくしゆ}学種」(学問の種、学問を学ぶ人たちのこと)を育てることを第一とするが、享和元(1801)年には正倫の意により藩の正式な儒官(儒学者)となり、藩校の弘道館へ出講することとなる。菅家では、この時に講堂の敷台が作られたと伝える。

さらに、文化元(1804)年と文化11年には、5代藩主・^{まさきよ}阿部正精の命により江戸へ赴く。



茶山肖像画(部分)

儒学者として藩に仕えた茶山であったが、その全国的名声は詩人としての評価によりなされた。六如上人をはじめとする宋詩に範をとった詩風を大成した茶山は、「当世随一の詩人」と評され、文化9（1812）年に刊行された詩集『黄葉夕陽村舎詩』は当時のベストセラーとなった。自費出版が常識であった当時、上木費は書林（書店）の負担、本仕立（本の構成・装丁）は茶山の望み次第という破格の待遇であった。この詩集の出版により、茶山の名は全国へと知られ、近世山陽道を往来する多くの文人墨客が廉塾を訪れるようになった。

当時の評価は、^{かめだぼうさい}亀田鵬斎に「菅君詩をもって、世に鳴る」と言わせ、大学頭・林述斎に「詩は茶山」と評されたことでもうかがえる。茶山は神辺という辺境の地にありながら全国的に名を知られ、まさに「地方の時代」の体現者でもあった。

ウ 茶山の教育観と教育

「村塾取立に関する覚書」には、茶山が教育を始めた動機、塾田等の利米の分配方法、講師の資質などとともに塾の教育内容についても触れている。

教育で最も重視したのは「行儀」である。まず、基本となる生活習慣を身につけるとともに、算術・手紙の書き方、四書五経を学ぶことが塾の学習の中心となる。さらに歴史や詩文についての理解を深めるための教材についても触れているが、「世説以外はその人にまかすべし」としており、歴史や詩文などについては基本的な学習の次と考えている。

塾生の教育は行儀を主とするかわら、教育する都講についても同様のことを求めて、徳行の優れた人物を選ぶとしている。また、各塾生の年齢や習熟度・個性あるいは興味にあわせた教育を目指していた。

現在、講堂の東側には、竹と板を組み合わせた竹縁と花崗岩に方形と円形の穴を穿った手水鉢（^{ほうえん}方円の器）がある。「水は方円の器に随う」。「方」は四角、「円」は丸を意味しており、水は器によってどのような形にもなることから、人も環境や教育・交友によって良くも悪くもなりうるという茶山の教育観を表している。

私塾であった黄葉夕陽村舎は、宅地・建物と塾田を福山藩に献上することで藩の郷校となった。この郷校にする経過や動機については、茶山の「郷塾取立に関する書簡」に述べられている。

塾運営の財政基盤の拡充と運営組織の整備に心を砕き、私塾は塾主あるいは塾運営者である個人の生死によって塾の存在そのものが左右されるため、私的なものから公的なものとなることで、塾の永続性を



間塾にて学文の図（部分）



竹縁と手水鉢

表 4-2 廉塾入塾・退塾者一覧

和暦	西暦	茶山年齢	入塾(人)	退塾(人)
文化8年	1811	64	28	8
9年	1812	65	25	15
10年	1813	66	32	38
11年	1814	67	12	18
12年	1815	68	17	8
13年	1816	69	22	15
14年	1817	70	26	32
文政元年	1818	71	28	42
2年	1819	72	42	22
3年	1820	73	15	15
4年	1821	74	18	27
5年	1822	75	24	21
6年	1823	76	22	29
7年	1824	77	15	13

「塾生預り銀差引帳」・「諸生金銀差引算用帳」より

目指した。

塾を郷校とすることで安定した運営を行い、経済的な安定を得るとともに、塾主あるいは講師としての適任者を選ぶことで、塾の安定を図ろうとした。

「閭塾にて学文の図」に見られるように、廉塾の教育は講釈中心であった。講釈に当たる人たちは、塾主である茶山のほかに都講(塾頭)と称された人たちである。都講は高い学識を持ち、茶山をあらゆる面から助ける役目を担っており、年少者の熟読の指導にもあたった。

塾生は、福山藩をはじめ中・四国、九州、畿内、東北にいたる全国各地から集まり、廉塾の門をくぐった。その数は2000～3000人と推測されている。身分は、武士・医者・僧侶・町人から農民に至る幅広い階層に及び、初歩学習を終了した10～20歳代の若者が多かった。

塾生が廉塾で学ぶためには、年4両2分の飯料と若干の書物料を払わなければならなかった。年4両2分の飯料といえば、当時の奉公人の1年分の給金よりはるかに多い額であった。このことを考えれば、ある程度富裕な家庭の子弟であったといえよう。もともと、貧しく飯料の払えない者は、塾の家事を手伝いながら学ぶこともできた。塾生の多くは在塾2～3年で郷里に帰って行った。塾生という身分から元の武士や町人・農民に戻り、日々の生活が始まるのであった。

村童日日挾書來 村童 日日 書を挟みて来る
講席偏愁暑若煨 講席 偏に愁う 暑の煨するが 若きを
歸路逢牛臥涼處 歸路 牛の涼処に臥するに逢て
直將牧堅疊騎回 直ちに 牧堅を將って 疊騎して回る

【意訳】 塾生たちが、毎日論語だか、孟子だか、唐詩選か知らんが、書物を小脇に抱えてやって来る。勉強を教える講席は、暑うてそれどころじゃあない。あぶるように暑うて、やりきれん。よそ見をしたり、汗を拭いたり、ろくに勉強もせんくせに、「今日はこれでおしまい。」と言うと、やれやれ、早う帰って涼もう。塾を出て裏の土手を上がった所で、涼しい場所へ牛が寝そべっているのが見えた。傍に友達の牛飼いの子がおり、相談が成立。二人並んで牛の背に乗り、喜々として帰って行った。

北川 勇「黄葉夕陽村舎詩 夏日雑詩 (四)」『茶山詩話 (第三集)』
菅茶山先生遺芳顕彰会 1994年

エ 茶山の交友

茶山は京都や大坂への遊学により多くの学者や画人たちと交友関係をもった。京都では池大雅、さらに、阿部正精の命で江戸へ赴いた時には、柴野栗山・岡田寒泉・尾藤二洲・古賀精里をはじめ、幕臣で詩に長じた岡本花亭・亀田鵬斎・谷文晁など多くの文人と交友をもつ。大坂では頼春水や懐徳堂第4代学主・中井竹山・弟の中井履軒などと交わり、その関係をさらに広げることになった。

また、近世山陽道の宿場町であつた神辺宿に居を構えた茶山の名声を慕って、多くの儒者・文人・画家などが訪れた。この芳名録が「菅家往問録」である。文化2(1805)年4月25日から記載が始まり、茶山の死後の万延元年(1860)年まで、総数530数名の記載がある。

廉塾を訪れた人々には、当代の一流の文人墨客がいた。茶山が京坂遊学中、あるいは、江戸に赴いた時に接した人々は、近世山陽道を上下する際には必ずといってよいほど塾に立ち寄った。

主な来訪者は次のとおりである。頼春水(広島藩儒)、頼杏坪(広島藩儒)、中村圃公(岡山藩儒)、浦上玉堂(備中・画人)、亀井昭陽(福岡藩儒)、佐々木雲屋(高松・画人)、土屋壺関(会津藩士)、巨野泉祐(白河・画人)、樺島石梁(久留米藩教授)、古賀穀堂(佐賀藩儒)、田能村竹田(豊後・画人)、梁川星巖・紅蘭夫妻(美濃・詩人)、広瀬旭荘(豊後・儒者)、中島棕隠(京都・儒者)。

記載された署名の多くは、訪れた年月日・出身地・姓名を記載しているが、詩文を添えているものも多い。茶山の人柄が、同世代・次世代の文人墨客達にいかに慕われていたかがわかる。

また、文化の中心地であった京都・大坂から遠く離れた田舎に暮らす茶山にとって、こうした人達の訪問は大きな喜びや楽しみであり、塾生にとっても大きな刺激となったであろう。このような盛況を呈していた時期は、郷校として認められた頃から文政期へかけてのことであった。茶山生存中は年平均 19 人、最も多い文政 2 (1819) 年で 35 名の訪問者があった。しかし文政 10 (1827) 年に茶山が没してからは、年平均 3 名と著しく減じる。

茶山は、文政 10 年 8 月 13 日、80 歳で亡くなり、川北村黄葉山麓の網付谷^{あみつけだに}に葬られた。葬儀には、近親者・福山藩関係者・弟子たちを含めて 200 余人が参列したと記されており、その墓碑は頼杏坪の撰文である（「文恭先生喪儀」）。

《引用文献》

神辺郷土史研究会『菅茶山とその弟子たち—神辺の歴史と文化第 4 号—』1976 年 10 月
矢田笑美子『近世の学舎 寺子屋～私塾～藩校へ』菅茶山記念館 2005 年 11 月
西村直城・岡野将士『菅茶山の世界』株式会社文芸社 2009 年 12 月

《参考文献》

「文恭先生年賦略」

・茶山の事績を簡潔にまとめたもの。当初、金栗園という学舎があり、後に家の東北へ学舎を建て、黄葉夕陽村舎と名付けたことや、廉塾と名付けたのは柴野栗山であることなどが記されている。

「郷塾取立てに関する書簡」 菅茶山著 頼春風写

・茶山は寛政 8 (1796) 年、塾付の田地いっさいを差し出して、郷塾にしてほしいと願っている。この資料は、この間の事情を茶山自身が筆記したものを頼春風が入手して筆写したもの。茶山の教育観をよく表すとともに、学問を志して塾を経営し、塾を藩に差し出すに至った動機について述べている（『広島県史』近世資料編VI）。

「塾生預り銀差引帳」・「諸生金銀差引算用帳」文化 8 (1811) 年～文政 7 (1824) 年

・塾生から徴収したお金（食費・書物代など）の収支帳。

「菅家往問録」文化 2 (1805) 年～万延元 (1860) 年

・茶山 58 歳の時から記されており、仙台藩儒・大槻平泉の署名から始まっている。平泉はこの冊子を茶山から預ったことについて、先生は以前に廉塾を訪れた人たちの姓名を忘れたことが残念なので、これ以後は訪問者の姓名を記録して残すことにしたと記している。

「菅太中存寄書」

・茶山の遺書であり、塾経営に関する心得を記したもの。文政 2 (1819) 年に書いたものを最晩年に補筆し、学問所世話人と塾の後継者、さらに大目付などの役人に差し出している。

「文恭先生喪儀」

・文政 10 (1827) 年 8 月 13 日から 22 日まで、日にちごとに儒教に則った葬儀の式次第と内容を記している。さらに、用意された棺の材質・寸法・仕上げ、棺蓋の内側に記された詩文、葬儀に用いられた道具や参列者の喪服などについても詳細に記録されている。

表 4-3 廉塾来訪者一覧

和暦	西暦	塾主年齢	来訪者 (人)	和暦	西暦	塾主年齢	来訪者 (人)
文化 2	1805	茶山 58	16	天保 4	1833	24	9
文化 3	1806	59	19	天保 5	1834	25	4
文化 4	1807	60	12	天保 6	1835	26	2
文化 5	1808	61	15	天保 7	1836	27	3
文化 6	1809	62	18	天保 8	1837	28	0
文化 7	1810	63	13	天保 9	1838	29	2
文化 8	1811	64	24	天保 10	1839	30	2
文化 9	1812	65	20	天保 11	1840	31	6
文化 10	1813	66	19	天保 12	1841	32	9
文化 11	1814	67	5	天保 13	1842	33	2
文化 12	1815	68	2	天保 14	1843	34	1
文化 13	1816	69	21	弘化 1	1844	35	0
文化 14	1817	70	28	弘化 2	1845	36	0
文化 15・文政 1	1818	71	25	弘化 3	1846	37	1
文政 2	1819	72	35	弘化 4	1847	38	3
文政 3	1820	73	22	嘉永 1	1848	39	1
文政 4	1821	74	20	嘉永 2	1849	40	2
文政 5	1822	75	21	嘉永 3	1850	41	2
文政 6	1823	76	15	嘉永 4	1851	42	0
文政 7	1824	77	18	嘉永 5	1852	43	1
文政 8	1825	78	26	嘉永 6	1853	44	7
文政 9	1826	79	26	嘉永 7・安政 1	1854	45	7
文政 10	1827	80	18	安政 2	1855	46	4
文政 11	1828	自牧齋 19	3	安政 3	1856	47	11
文政 12	1829	20	0	安政 4	1857	48	0
天保 1	1830	21	0	安政 5	1858	49	2
天保 2	1831	22	2	安政 6	1859	50	5
天保 3	1832	23	4	万延 1	1860	51	7

「菅家往問録」（『広島県史』近世資料編VI）を基に作成

(3) 本質的価値

茶山は、神辺という地方に住みながら学問を修めて私塾を開き、後に郷校として全国から集まる多くの子弟を教育した。地方に住み続けることで、農村の荒廃や社会秩序の乱れを直接受け止め、学問によって現状を是正することを考える。そのためには、正しい学問を学ぶための教育と教育施設が必要であることを強く主張した。

廉塾について

廉塾と茶山旧宅の間を東西に流れる水路は、北側が教育の場、南側が日常生活の場とされていた。

敷台より右の3室・20畳が当時の講堂で、襖をはずして講釈に利用された。講堂の北側は浴室・便所、西側は書見所、東は竹縁が設けられている。茶山が神辺宿大火後に居住した槐寮（塾台所）は、自牧斎の時代に廉塾と接続され、明治20年頃に二階が増築されるが、付属施設の米蔵・小屋とともに教育施設として塾が機能していた当時の形態を残している。



廉塾講堂

茶山旧宅について

茶山が晩年に過ごした住まいである。塾が機能していた時代のもものとしては、6畳二間・納戸と2階の10畳（板間）、玄関、玄関土間、書齋である。旧宅西側の中之間・新座敷・2階和室は明治時代の増築と考えられるが、歴代塾主の旧宅として当時の面影を残している。

付属施設・工作物について

現存する寮舎は南寮である。当初の南寮は、弘化4（1847）年以降に現在の位置に改築されたものと考えられるが、塾が機能していた時代に塾生が生活する場であった。表門・中門も当時のもので、表門と両側の土塀はクスノキと相俟って当時の景観を伝えている。

養魚池、木小屋、菅家の先祖を祀る祠堂、書籍・書画・書状類を保存してきた書庫も当時の場所に位置し、特別史跡を構成する要素として欠かすことができない。

水路は、高屋川から導水され塾の南東で三又に分岐している。

南は川北村、西は川南村に流れ、農業用水として利用されてきた。この水路と石段は塾の整備とともに築かれ、茶山詩文の借景となっている。

人物について

「茶山に学べ」。神辺では昔から言い続けられて来た言葉である。

江戸時代後期を代表する漢詩人・儒学者として全国に知られた茶山。ただし、この特別史跡を特色づけるのは、教育者としての茶山である。塾を開き、全国からその名を慕って来た者を、塾生として分け隔てなく受け入れた。茶山が教育で最も重視したのは「行儀」である。また、教育を受ける機会を与えてくれた家族に感謝することを塾生に求めた。「誰もが平等に教育を受ける機会に恵まれるべきである」という茶山の思想は、現在にも通じる教えである。

江戸時代に盛行した私塾は全国に1500もあったといわれている。廉塾ならびに菅茶山旧宅は、その中で最も良く旧観を維持しており、当時の教育施設と歴代塾主の旧宅とともに茶山の息遣いを今に伝える貴重な特別史跡といえる。



水路と廉塾講堂

2 新たな価値評価の視点

廉塾ならびに菅茶山旧宅が史跡に指定されたのは1934（昭和9）年であり、当時の塾関係施設や寮舎、茶山旧宅が現存することが指定理由となっている。さらに、1953（昭和28）年には、当時の私塾として教育環境を現在に伝える全国唯一の施設であることから、特別史跡に指定されている。

この段階では、塾関係施設や寮舎、茶山旧宅とあるが、廉塾が機能していた時期からある建造物の特定は、細部にわたってはできていなかった。

その後、「廉塾屋敷図」（文政7（1824）年頃）が発見され、広島県文化財ニュース209号（平成23年）において初めて公開された。この図には、当時の建物や農地、池、水路などが描かれており、「廉塾家相図」（弘化3（1846）年）、史跡及び特別史跡の指定時の資料と合わせて、往時（1824）と今日との間において、建造物等の継承と変遷（変化）を把握することができる。

このうち、現存する建物で往時から存在していたものは、次のようになる。

- 廉塾・付属施設（廉塾屋敷図・廉塾家相図：廉塾，タイ所…増築により接続，2階増築）
- 米蔵（廉塾屋敷図・廉塾家相図：土蔵）
- 米搗小屋・物置・便所（廉塾屋敷図・廉塾家相図：小屋…位置は米蔵の南隣，現状は西隣）
- 表門（廉塾屋敷図・廉塾家相図：表門…東へ移動）
- 中門（廉塾屋敷図・廉塾家相図：門）
- 茶山旧宅（廉塾屋敷図・廉塾家相図：六畳，六畳，ナント…その後，弘化3年まで，明治20年頃増築）
- 寮舎（廉塾屋敷図・廉塾家相図：南寮，弘化3年以降改築）
- 水路・石段（廉塾屋敷図：図示，アライバ）
- 養魚池（廉塾屋敷図：前池…廉塾講堂の東側，文政8（1825）年南側に移設）
- 畑（廉塾屋敷図：田，畑）

したがって、増築等はあるにせよ、現在の建物の大半（「湯場・物置」以外）及び水路は往時（文政7（1824）年頃）に存在し、養魚池も廉塾として機能していた時期につくられたものと考えられ、個別的に本質的価値が特定されたことになる。

また、書庫や祠堂も廉塾屋敷図では存在していないが、「廉塾家相図」（弘化3（1846）年）頃までには存在したと考えられ、廉塾が機能していた時期の建物であることから、本質的価値を構成すると捉えることができる。

一方で、建造物の変遷（変化）の状況を把握するためには、建物や池などの地下遺構を把握する必要があることから、発掘調査の実施を予定しており、その成果を新たな価値評価の基準とし、本質的価値を構成する要素への追加などを検討することとする。

さらに、今後の史資料調査などで把握した内容も、精査して新たな価値評価への反映を検討する。

3 構成要素の特定

特別史跡の保存・活用及び整備においては、本質的価値を構成するものが何であり、また、それ以外の構成要素にどのようなものがあり、それらをどのようにしていくかを検討する必要がある。

このため、本質的価値を構成する要素、及びそれ以外の構成要素を明らかにしていく。

このうち、本質的価値を構成する要素以外については、要素の性質、特別史跡やその保存・活用との関わりを考慮し、大きくB～Eの4つに区分する。

A：本質的価値を構成する要素

- ・特別史跡の指定要件に関わる要素（それが失われた場合、指定解除の検討要因となる要素…例えば、指定地内に対象要素のみ存在したと仮定し、それが失われたとき、指定解除になるかどうか）

↓

具体的には、次の要素とする。

- ・廉塾ならびに菅茶山の居宅として機能していた当時（その前身の黄葉夕陽村舎又は閭塾を含む。以下同様）に存在していた要素
- ・廉塾ならびに菅茶山の居宅として機能していた当時に存在していた建物の増改築部分…茶山旧宅など

※保存を前提に、復旧・整備や活用を考える。

B：歴史的環境や背景を構成する要素（本質的価値を構成する要素以外）

- ・廉塾ならびに菅茶山の居宅として機能していた時代以外の文化財や歴史的環境、今日までの歩み・変遷に関わる歴史的な要素で、前記の本質的価値を構成する要素以外

※原則、保存することとするが、修理や更新等においては、本質的価値を構成する要素などを考慮しながら、そのあり方や整備の内容を考える。

C：自然的環境・景観を構成する要素

- ・指定地内における自然的な要素のうち、本質的価値以外のもの
- ・指定地内から見た周辺の歴史的な景観要素（借景など）

※本質的価値を構成する要素や歴史的な経緯、現在における状況、周辺環境などを考慮しながら、そのあり方や植栽整備の内容（保全や整備・充実、一方で除去や再整備）を考える。

D：保存・管理や利活用に関わる要素

- ・史跡の価値の顕在化及び保存・活用に必要（有効）な要素
- ・特別史跡を維持・管理していく上で必要な要素

※本質的価値を構成する要素との関係や利便性、景観、劣化状況などを考慮しながら、そのあり方や整備の内容を考える。

E：その他の要素

- ・特別史跡の歴史や自然、保存・活用とは関わりのない要素

※状況に応じて、景観的な対応（設備の更新、修景など）や移設などを考える。

表 4-4 廉塾ならびに菅茶山旧宅に関わる構成要素（1 / 2）

区分		主要な要素		
		種別等	構成要素	
指定地内	A：本質的価値を構成する要素	地形・敷地（地割）	建物の敷地，畑，水路，養魚池等で構成されている地形や地割	
		建物 ※付属物を含む	廉塾・付属施設 ※建物内に残されている史資料を含む（史資料が残されている他の建物も同様）	
			寮舎（南寮）	
			茶山旧宅	
			祠堂	
			中門	
			米蔵（北側）	
			米搗小屋・物置・便所（小屋…米蔵の西側）	
			米蔵・納屋・馬小屋・物置（木小屋，茶山旧宅の西側）	
			書庫	
	表門及び土塀（表門の両サイド）			
	東土塀			
	庭園・植栽	廉塾の機能していた時代にあったと推定される庭園（植栽），葉園跡，古木・大木 ※現時点では未確認		
	工作物	水路（東西及び南北），水路の石段		
		石組み側溝（茶山旧宅・祠堂と米蔵・納屋・馬小屋・物置の間）		
		養魚池		
井戸（2箇所）				
手水鉢等の石造物（要確認）				
通路（表門～中門：歴史的なみち）				
農地	畑			
地下遺構	建物跡，庭園跡など ※史資料により変遷が跡づけられるものがあり，地下遺構として遺存している可能性が大きい。			
史資料	広島県立歴史博物館，菅茶山記念館等に収蔵されている史資料			
B：歴史的環境や背景を構成する要素（本質的価値を構成する要素以外）	建物 ※付属物を含む	風呂場・物置		
		西土塀（養魚池西側）		
		客門，生け垣，板塀（茶山旧宅の付属施設）		
	工作物	庭園等にある石造物（要確認）		
地下遺構	※今後の発掘調査の結果などをもとに，具体的に検討			
C：自然的環境・景観を構成する要素	庭園・植栽（緑地，樹木，植え込み）	廉塾の機能していた時代より後につくられた庭園・緑地，植栽・生育した樹木，草花		
指定地内	D：保存・管理や利活用に関わる要素	保存施設	史跡標柱，説明板，境界標（杭） 制札（注意札） 竹垣	
		公開・活用施設	広場（入り口付近，送迎スペースと兼用） 案内ボックス 案内標識（送迎スペース，トイレ）	
		便益施設	ベンチ 緑陰（入り口付近のベンチのある辺り） 送迎スペース	
		維持管理施設	防災施設（消火） 上水道（洗い場，散水栓） 水中ポンプ（東側の水路：畑への散水） 防犯灯（電柱）	
	E：その他の要素	工作物	電柱・電線類，アンテナ，俳句ポスト ブロック塀（東側，西側の境界） スレート塀（東側：ブロック塀と連続）	

表 4-4 廉塾ならびに菅茶山旧宅に関わる構成要素 (2/2)

区分	主要な要素	
	種別等	構成要素
指定地外	B : 歴史的環境や背景を構成する要素 (本質的価値を構成する要素以外)	菅茶山の墓 (県史跡) 神辺本陣 (県史跡・重要文化財) 近世山陽道, 茶臼山 (要害山), 天別豊姫神社 近世山陽道沿いの町並み (神辺本陣を除く) 黄葉山 (神辺城跡)
	D : 保存・管理や利活用に関わる要素	保存・活用施設 (建物) 観光ボランティアガイド詰所 便益施設 (建物) 観光用トイレ

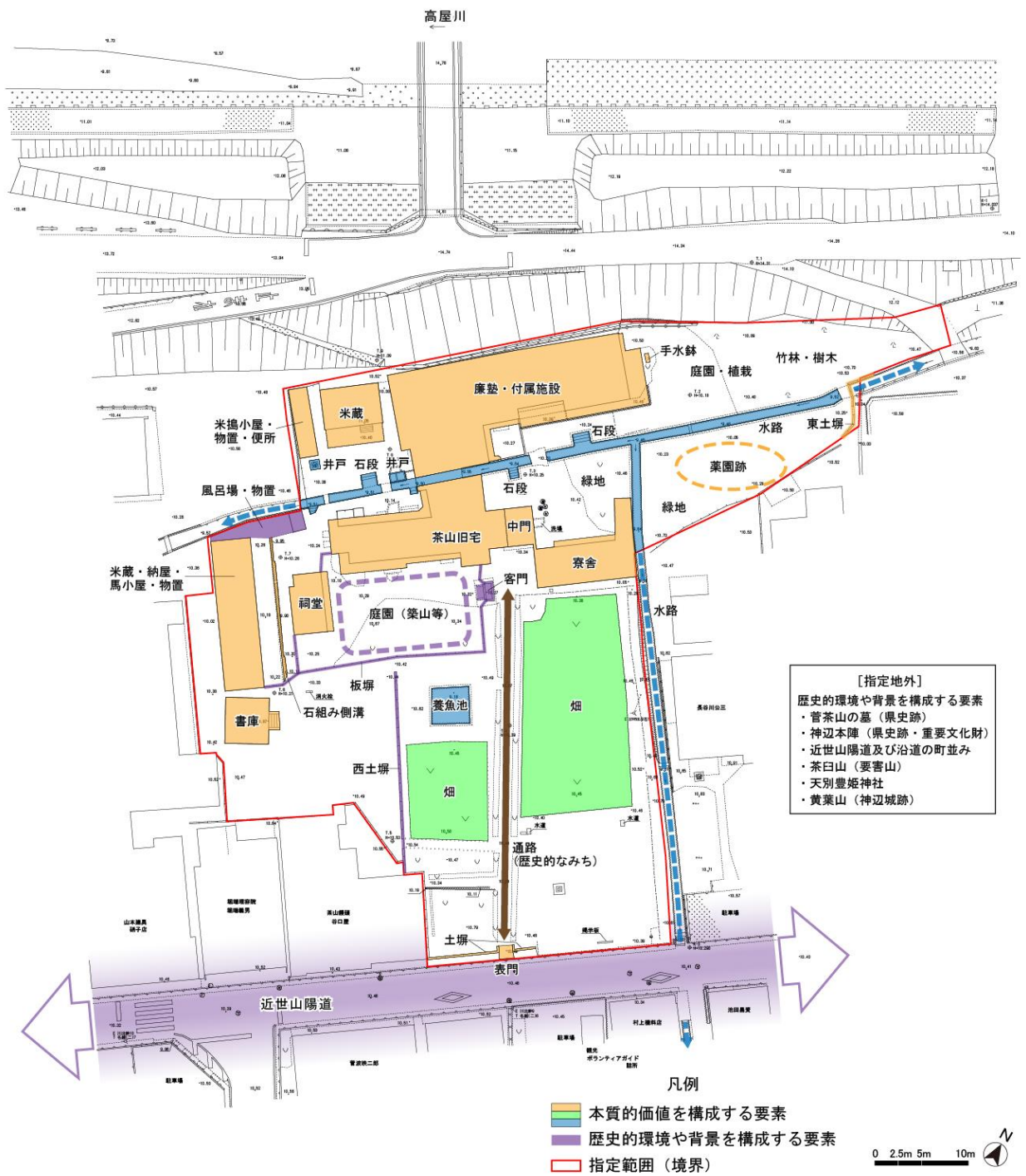


図 4-2 本質的価値を構成する要素及び歴史的環境や背景を構成する要素